

# 木滑物語

## 高倉山

標高922.2mの木滑の裏山。形が綺麗なことから「吉野富士」と呼ばれることもあります。かつては炭焼きなどで木を利用していましたが、現在では燃料として木材を利用しなくなったため、山に入る機会が少なくなってしまいました。一度人間が足を踏み入れたにも関わらず手を入れない山は荒廃してしまうため、木滑では森づくり作業として登山道整備をはじめ様々な活動を行っています。人が山に入ることによって環境や生態系を維持するとともに、人々が受け継いできた知恵を次世代に繋いでいければと思っています。



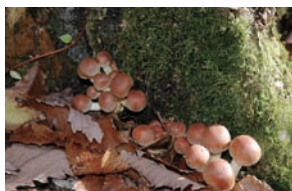
**木滑集落**  
国道157号線沿いにある、石積み特徴的な里山集落。下木滑、上木滑、木滑新の3集落があります。高齢化率が50%を超える地区があるため、20年後の存続が危ぶまれる場所ではありますが、里山木滑の生活の中には、古く受け継がれた素晴らしい知恵が詰まっています。自然と共生するその文化から、今学ばべきことがたくさんあると信じ、木滑では里山文化に触れる活動もっています。



**人夫**（にんぶにんぶ）  
木滑では「にんぶ」といいます。一軒から一人、集落内の清掃などの作業にです。春には雪解け水とともに流れてきた大きな枝や泥を川からあげたり、田んぼ作業に備えて側溝など水路を綺麗にする「えざらい」も行います。その作業は大きな河川（手取川）に大きなゴミが流れていくことを防ぎ、川をきれいに保つことにも繋がります。なかなかの肉体労働も伴うため、最近ではボランティアの方にも参加してもらい、山の清掃作業を行っています。



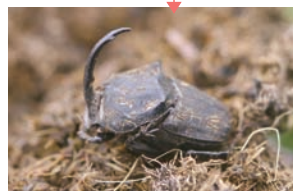
**タゴガエル**（左下は岩の隙間の卵塊）  
本州、四国、九州に分布する体長3〜5cmのアカガエル科のカエル。伏流水中に卵を産み、オタマジャクシは餌を食べずとも変態することができるという特殊な生態をもちます。石川県では、低地の丘陵地帯から白山の2000m以上の高所まで見られ、高倉山では5月頃に林道沿いの沢周辺から「ググッ……」と鳴く声が多数聞こえます。



**クリタケ**  
晩秋、広葉樹の切り株や倒木に東になって生え、ときに大きな株になります。白山麓では「もたせもちあし」や「ゆきふり」などと呼ばれる食用きのこです。柄の下部はやや堅いものの、よだしが出るので、汁物や鍋物、きのこご飯にも向いています。よく似て黄色っぽいニガクリタケは猛毒ですが、苦味が強いので区別できます。なお、ナラタケ（食用）も「もたせ」と呼ばれます。



**ギフチョウ**  
翅を広げた大きさが5〜6cmになる中型のチョウ。黄色と黒の縞模様で、後ろ翅の後半部に赤色や青色の紋があります。石川県では加賀地方に分布し、木滑周辺では4月頃に成虫が見られます。赤から赤紫色の花を好み、雄木林やその周辺に咲くカタクリ、スミレ類、サクラ類をよく訪れます。幼虫はカンアオイの葉を食べて育ちます。



**ツノコガネ**  
体の割に大きな角を持つツノ虫で、動物の糞を餌としています。石川県ではほとんど記録がありませんでしたが、放牧を行った木滑では、牛糞の中に多く生息が確認されました。野生動物の糞でかろうじて生存していたツノコガネが、放牧の再開によって速やかに個体数を増したものと考えられます。ツノ虫は、放牧地の糞を処理してくれ、里山の生態系に重要な役割を果たしています。

## 高倉山

### 高倉山の動物たち

（カモシカ、クマ、サル、イノシシ、ニホンジカ）  
高倉山にはカモシカやクマ、サルなどの大型野生動物が昔から棲んでいました。住民の高齢化や第1次産業の衰退により、耕作放棄地が増えたことで、これらの動物が増加。また奥山と里山の境界線が次第になくなった結果、動物たちは集落の農作物を荒らすようになりました。そして2,30年前にはほとんど見られなかったイノシシが急激に増加。近年はニホンジカの生息も認められるなど、さらなる農林業被害の増大が懸念されます。里山では、動物との共存を目指しながらも、闘わなければいけないという現実があります。人と動物がそれぞれ快適に暮らせる空間や緩衝地帯を保つため、山づくりや耕作放棄地の復元などを行っていくことが大切です。



**猟師さん**  
木滑では集落の猟師さんが里山祭「山笑い」でのかんじきウォークや、高倉山の「かんじき登山」の案内役として活躍しています。野生動物の絶対数が増加している一方で、もともと白山麓では生業として猟師で生計を立てることがむずかかった上に、猟師の高齢化によって狩猟人口が減少しており、若手の猟師育成が課題となっています。最近では、県内では初となる「白山ふもと会」の獣肉加工処理場に捕ったイノシシを卸し、その肉は白山麓の安全でおいしいジビエ料理として親しまれています。

**釜の上（かまのうえ）・耕作放棄地**  
農業用機械が大型化した時期を境に、傾斜のある中山間地では機械が入る大きな農道がないため、また高齢化に伴い田んぼをやめる農家さんが相次ぎ、耕作放棄地が拡大しました。ただ、この「釜の上」と呼ばれる場所は、建物が一切ない山のふもとに、まっすぐの農道が一伸び、その両側には石積みの田が広がる美しい風景があります。



**カタクリ**  
石川レッドデータブックでは準絶滅危惧ですが、木滑には比較的多く見られます。しかし、なぜか旧白峰村地区では、ほとんど見ることができません。明るい落葉樹林に生育するカタクリは、春植物と呼ばれるように、雪どけ後すぐ芽を出し、葉を広げ、花を咲かせます。受粉にはチョウ類やハナバチ類など、種子の分散にはアリ類といったように、繁殖には多くの動物との関わりがあります。



## 展望 白山

### ブナ林

白山麓では、人の手が入る前、標高約400m〜1,600mの山地の大半はブナに覆われていたようです。そのため、この標高で示される範囲の植生帯を「ブナ帯」とも呼ぶように、その地域の自然に最も適した、つまり最も安定した植生がブナ林であると言えます。ブナ林は、水源涵養や土砂流出・雪崩防備など様々な機能を有しています。また、ブナの花や実はツキノワグマの大好物であるように、ブナ林は大型ほ乳類をはじめ、多くの生きものの生息地となるだけでなく、そこから流れ出る水が川となり、やがて海にそそぎ、豊かな川や海の生物を育むその源でもあるのです。高倉山では、瀬波集落の山側や、標高800m山頂にかけてブナ林が残されており、春にはカタクリやイワイチョウ、ミツバツツジ、タムシバなどの花々に彩られます。



共に生きる。  
山の営みが生物多様性を支え、  
その生物多様性が、私たちの日常生活を支えます…

山から川、川から魚、魚から人。  
自然の循環の中で森づくりの活動は  
みんなの暮らしにつながります

木滑では、一緒に森づくり、  
山づくりをするメンバーを募集中です！  
白山麓のタカラを体感しましょう！

